日米文学交流史の研究

木村毅

恒文社

＜著者略歴＞
木村　毅（きむら・き）
評論家，作家，文学博士。
岡山県生まれ。早稲田大学英文科卒。
明治文化の研究に一貫して打ち込む一方，大正時代，中里介山の『大菩薩峠』を発掘，刊行。また，昭和初期の円本時代を開く文学全集刊行の創始者。明治文化研究会会員。早稲田大学百年史編集委員。文学博士。元神戸松蔭女子学院大学教授。主著に『小説研究十六講』ほか多数あり。
1979年9月18日，心不全のため東京・目黒区の東邦大付属大橋病院で死去，85歳。

©1982

日米文学交流史の研究
定価　五、八〇〇円
一九八二年六月三十日　第一版第一刷発行
著者　木村　毅
発行者　池田恒雄
発行所　株式会社　恒文社
東京都千代田区神田錦町三―三
電話　〇三―二九一―七九〇一
振替口座　東京五―三五八二四
印刷　鈴木整版　製本　飯塚製本
乱丁・落丁本はおとりかえいたします
ISBN4―7704―0495―6 C3095

序

——文学交流史を研究の新分野として確立するために——

一

十九世紀のはじめ、ハムフリー・デヴィという化学者が粘土をいじくっていて、

「わしは何だか、新しく金属らしいものを分析しかかっているような気がする」

といって、その金属にアルミニュームと命名した。私はいまそれを思出すのである。

「わたしも文学の国際的交渉の研究の上に、いささかながら新らしい分野を開きかかっているような気がする」

と、じつは、いいたいので、それを仮りに文学交流と呼ぶことにする。言葉は新らしくないが、それに若干の新意義をふくめて拡大をはかるのが、私の念願なのである。

広くいえば、それは比較文学の一翼に入るべきであろう。しかし比較文学は、だいたいにおいて文学と文学とを合せ鏡とするのが使命である。アメリカ文学が日本文学にどう影響したか、日本文学がアメリカ文学にどう反映したか。そういうことをしらべて、その文学が経済や政治や外交や宗教や風俗習慣や、ひろく言って実際生活に及ぼしている影響になると、多くはすてて顧みない。ところがわが文学交流史では、そこまで考察範囲にいれるのである。

たとえばポーの小説と泉鏡花の作との類似が明治時代にしばしば説かれた。あるいは谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川

竜之介などの諸家の創作に、ポーが影を落していることが指摘せられている。また学者詩人日夏耿之介はその「大鴉縁起考」においてつぶさにポーのこの詩を論攻したばかりか、はるかに支那の古詩「鵩鳥賦」（誼賈）に言及して、その異同に興味のゆたかな問題を提出している。それらは立派な比較文学の仕事である。

又、百人一首によって和歌の詩形が、アメリカのある女詩人を刺戟して Cinquain（五行詩）という新らしい詩形を創案させ、あるいはホイットマンの詩が、日本の自由詩、民衆詩の勃興の暗示になったのが説かれる。これも比較文学の領域に属する。

ところが国木田独歩が愛人と散歩する際にブライヤントの「水鳥に」を語ってきかせたり、徳富蘆花が路傍の「りんどう」の花にやはりブライヤントの詩を思出したりしているのは、文学者への影響ではあっても、それがまだ作品として再生産されるところまでは行っていないのだから、実際生活のうるおいとなっているにとどまって、純粋な文学的影響とは言えない。少々、逸脱しかかっている。

また永井荷風はワシントン・アーヴィングの『スケッチ・ブック』の中の「ブロークン・ハート」という短篇から早熟をうながされて、遊蕩児になるきっかけをつくったようなことを言っている。いよいよもって文学からは遠のいてくる。

安部磯雄は、同じワシントン・アーヴィングが愛人の死を痛哭して一生涯貞潔の生涯をおくったのにひどく感動して、しばしば説教で語っており、木下尚江はホウソォンの『伝記物語』のクロンウェルの話に感激して革命家となった。ここまで来れば、文学の与えた影響ではあっても、完全に文学上に受けた影響ではない。くどいが、文学が実際生活に及ぼした影響というべきで、文学史や比較文学の研究家は、小数点以下として切りすてるところである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

それでも木下尚江でも、安部磯雄でも、著作が多くて、まだ文学と関係がつながっていると言えば言える。

ところが更に先代のルーズベルト（シオドア）大統領のような例になると、どうか。

彼が、日露戦争の講和斡旋に肩をいれ、「おれは日本の外務省の小役人になったほど、細かに気をつかってやった」といっているが、その動機となったのは、若いとき四十七浪人物語をよんで、日本人に興味をもったのが始まりだと、あのときの日本全権の小村寿太郎に語っている。

ルーズベルトは、日露戦争の講和を成立させたのが、世界平和に貢献するところ大であったというので、アメリカ人として最初のノーベル賞を与えられる栄誉を得た。彼はまた『武士道』をよみ、柔道の存在を知り、山下義韶十段がアメリカにきているときいて、わざわざ招いて自分で柔道のけいこをし、又自分の邸内で日本の柔道家とアメリカのレスリング選手との対抗試合をさせている。こういう事が遠因をなして、今日の柔道の世界的流行を招来し、ゆくゆくはオリンピックの競技種目にまで加えられそうな形勢にある。

こうなれば、もう完全に文学以外だ。しかしこの大元（おおもと）が赤穂浪士物語から出発している以上、文学に無縁とは言ってしまえない。ところが、これまでの文学史や比較文学のような学問では、ここまでひろい上げられるあてがない。が、その関係は捨てて顧みないですむだろうか。無視して文化的損失にならないだろうか。

断じて否！　である。そこでそれらまで包括して拾い上げることを、ここに交流史という新らしい研究分野を開拓し、特設して、可能にしたいのが、私のねらいなのである。

三

なぜ私が文学交流史を独立させることが必要だと考えだしたかと言えば、その理由はこうである。

いまから六年前の昭和二十九年（一九五四）がペリーの黒船来航の百年にあたり、政府は開国百年文化記念事業会という外部団体をつくって日本文化史十二巻、日米文化交渉史五巻、補遺二巻を刊行した。私はその中の「学芸風俗篇」の編纂を担当し、その一項目の日米文学交渉史は自分で執筆した。

そのとき私の気づいたのは、アメリカ文学が、日本文学に交渉し、影響していることが、如何にも貧弱で稀薄だったことである。いままで通りの比較文学の見地を守って考察するなら、なにほどの分量もない。

それはアメリカにはホーマー、ダンテ以来というような長期にわたる歴史的背景もないし、シェークスピア、ゲーテ、近くはユーゴー、トルストイに匹敵すべき百世に卓立するような大文豪が出ていない。またフランスの象徴主義、自然主義のように日本の詩壇や小説界を大きく深く感化したイズムもおこっていない。ウィリヤム・ジェームズのプラグマティズムが、明治の哲学界を風靡したほどの役割を演じたものが、文学の方には見あたらぬ。

そのため、日米文学の交渉は、資料も少く、まことに精彩を欠いているから、その史的考究もおそらく「男子一生の事業とするに足らず」と考えられて、閑却せられてきたのも無理はない。

私は、これでは予定の紙数をみたすだけの著作になるか、どうか心配したぐらいだった。

しかし見方を、ちょっとひろげると、状況は俄然一ぺんしてくる。文学が文学の上ばかりでなく、さらに広く実生活にあたえた影響をたぐってゆくと、そこには未掘の文化的鉱脈が無尽蔵に埋伏しているのが展望された。

これにはアメリカが、日本開国の先頭をきったため、後進国として親切にわが国を待遇し、また日本はアメリカが自由、平等、博愛を建国理想として他国を侵した歴史がなかったという点に安心して信頼したので、半世紀の間この上ない平和親愛の国際関係が、両国の間にむすばれた。日本人の一ばん多く渡航移住した外国はアメリカで、また日本にきた外国人で最も数の多いのもアメリカ人である。

そこで双方とも、専門の文学者以外で、その文学を素人なりに身につける機会が、非常に多かったわけである。

私は、その文学が、日本人の実生活にまでしみこんで、感化を及ぼしているのは、ロシヤ文学が一番だと思っていた。北村透谷が『罪と罰』をよんで「私は考えることをしている」というラスコリニコフの言葉に深甚の意味を感じて、それを夫人に語ってきかせたり（藤村の『春』にこの記述あり）、田山花袋が国木田独歩と一しょに、二葉亭の訳した『浮草』の中にある「血が冷めたくて頭の温かい男」という表現をくり返して酒をのんだり（『東京の三十年』をみよ）しているのは、作品に結晶していないのだから、文学者の上に及ぼした影響ではあっても、文学に与えた影響ではない。

また徳富蘆花のように、トルストイヤンの生活を実行して、都下の郊外に晴耕雨読の日を送ったのなどは、文学によってその生涯を支配された最も顕著な例である。

しかし、日米おたがいの文学が、相手の国人の実際生活を動かす力になっている例は、どうもロシヤ文学が日本のインテリゲンチャを感化したのに、すこしも劣らない。しかも文学関係の人ばかりでなく、もっと広汎にわたって、その感化が及んでいる。

昭憲皇太后のフランクリンの十二徳の和歌などは、歌だから形式こそ文学だが、その内容は原文もそうなので、全

く実践道徳である。

ラフカディオ・ヘルンとなると、その反対にこれは又道徳ぬきで、日本に帰化して小泉八雲と名のり、紋つきの羽織をき、なた豆ギセルで灰ふきをたたきながら煙草を吹かすような生活を送った。彼の女性の親友で、愛人ではなかったかとさえ言わるるビスランド嬢は、ヘルンの伝記書翰を編纂して有名な女性だが、嫁してウェトモーア夫人となると、ニューヨークに住みながら東京から畳をとりよせて室に敷き、茶簞笥をすえ、羊羹をきり、宇治茶をいれてのむような日常生活を送った。

そういう点にまで広く網を打って、両国文学のからみ合いを大観しようとなると、比較文学では、最も面白い材料が網の目からこぼれ落ちるような気がする。新旗幟（?）を立てて、文学交流史としての私の試案をここに提示する所以である。

四

多少とも新奇な仕事にかかるには、手をよごして、まず資料を集めることに尻ごみしてはならぬ。紙屑でも、木の根ッこでも、ビールのあきびんでも、せと物のカケラでも、鼠のしっぽでも、見つかる物は一応なんでも、かんでも拾い上げるバタ屋の精神の旺盛が要求される。

その上で利用すべき資料と、役に立たぬ資料との選別にかかるのだが、この際私は自分が学閥という背景を負わず、身がるなルンペン研究家であるのを喜ばずにはおられなかった。というのは厳正な学者だったら、学界に気がねして、使用をためらうような資料も、吾々には、どこにもはばからず拾いあげ、使っていい自由がある。

たとえばアメリカの「独立宣言」の起草者がジェファソンでなくて、トム・ペンだったのではないかという新聞記事をみても、それをすてないで、著書の中にとどめておく勇気は、世間普通の学者には、とても無いだろう。（本書「天は人の上に論考」の付註をみよ）また荷風の lettre d'amour を正面から論考の対象とするようなことは気がひけるであろう。しかしジャーナリスト上りの吾々から言えば、その使命はむしろ、そういう興味のもち方、問題の取り上げ方をするところにある。だからある意味で、文学交流史はジャーナリズムと学問的研究との合体なのだ。そんな知識は知らない方がよかったとは誰れにも言えない。

私が、このことを特にこの序文で明かにしておくのは、こういう企図に同情のない批評にたいする防衛の意味からである。

たとえばここに Philip Yampolsky 君がある。この人は私の著書を英訳したその序文で、こう言っている。

Professor Kimura has written on the subject of Japanese-American literary relations. In doing so he has used a style of writing relatively unfamiliar to Western readers, but encountered frequently in both China and Japan. Informative, light, digressive, and highly subjective, it shuns the precise critical standards demanded of Western historical works. The Japanese reader, he he scholar or layman, takes delight in works of this sort; the stray miscellanies of information please his fancy, the authour's opinions, whether he agrees with them or not, stimulate his thoughts. Professor Kimura is referred to by his colleagues as a MONOSHIRI HAKASE, a man gifted of great knowledge of a vast variety of subjects. Drawing upon this knowledge, professor Kimura has written of American and Japanese literary

relations, of the literary figures concerned, and of other subjects, related or unrelated, which interest him.

「この書き方は、支那や日本ではよく見うけるが、西洋の読者はいささか面くらわされる。暗示的で、かるくて、岐路へ入って、非常に主観的で、西洋の歴史的著作には、必須とせられる厳格な批評的立場を欠いている。……木村教授はその知識の上に想をかまえて、日米文学の関係をかいているが、ただに文学者ばかりでない、彼の興味をひくとなれば、関係があろうが、あるまいが、他の題目にまで亙っている」

ヤムポルスキー氏の非難する「関係があろうが、あるまいが、他の題目にまで亙っている」というのは、じつは私が念として積極的に心がけたことなのだ。比較文学の観点に立てば、文学以外の点にわたり、その純粋さを欠く点で、この批評は当っているであろう。しかし私の企図したのは、アメリカ文学が、日本人の生活にどう影響したかも含めて考えることであったのだ。

ちなみに開国百年記念事業会のため執筆した私の「日米文学交渉史」は、その部分のみ独立して英訳して "Japanese Literature: Manners and Customs in the Meiji-Taisho Era" と題して刊行されている。右にひいたヤムポルスキー氏の文章は、その序文の一節なのである。

しかし又私の意図を汲んだ批評も散見した。早稲田大学の西村稠教授がある英語雑誌で拙著を批評せられた中に、この本では『モービ・ディック』に経済的な見方をしている。この小説に経済的な照明をあてたものは、木村が初めてだろうというような一節があったことを記憶する。してみれば、ここでは、私の考察が文学以外に逸脱していることが、是認せられている模様である。私は具眼の読者を恵まれたことに満足した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

胸の底に、ひそかに唯物史観をあたためながら、私が「文学は予言する」（モービ・ディック）の章をかいたことは、言うを要しない。

若いころマルキシズムの波にあおられたものは、どんな問題に向っても、一おうはやはり、その線によって、自分の研究の鉄骨をくみ立ててみる誘惑を感ずる。そこでマルクスがアメリカを何と考えていたか、歴史的にしらべてみるだけの順序は、私も腹の中で蹈んだのである。

マルクスのアメリカ観は『共産党宣言』と『資本論』第一版の序文、それにリンカーン大統領が再選せられた時におくった書翰などに散見するのを、よせ集めると大たいわかる。

コロンブスのアメリカ発見をもって、マルクスはブルジョア勃興の新らしい地盤（Neues Terrain）を開いたものとみ、アメリカの独立革命は十八世紀のヨーロッパの中産階級のために警鐘（Sturmglocke）をうちならし、アメリカの南北戦争は同じく十九世紀のヨーロッパの労働者階級のために警鐘をうち鳴らしたものだと言って、つまり三段にわけてみている。

これを土台にふまえ、その上部構造としてのアメリカ文学がどんな発展をなしたかを大観し、そしてソ連の著作者たちが日本の歴史をどうみているかということと対照して、両国文学の相関々係を説くのは、大いに試みるに値する仕事ではある。

アメリカはその歴史において封建時代を経験せぬ新大陸であり、日本はその反対に、これを七百年の長期にわたって、十九世紀の半ばまで存続した島国である。この両極端の国が、しかも一方はその農業時代から工業時代へうつり代りの兆候があらわれ、黒人奴隷解放の苦悶でのたうちまわる前後、他方はその封建制度がもちきれなくなって、崩

壊しかかってきた時で、どちらも浮き腰立っている時に鉢あわせをした。

アメリカの至上理想は、自由平等博愛なのだが、その中日本が先ず一ばんに関心をもったのは「天は人の上に」や「官武一途庶民にいたるまで」の言葉で察せられる通り、「平等」であった。日本が古くから最善としたのは仁義忠孝の儒教道徳だが、ルーズベルトは忠臣蔵において、個人的幸福を無視して主君のためにつくす「忠」の面に興味をひかれている。それらはなぜか。——こういう点を対比して論究していったら、面白く思われるので、私はその点に多くの魅力、誘惑を感じながら、本書では、史のバランスをこわすことをおそれて思いとまった。

しかし一たいに唯物史観文学史は、私もいろいろ渉猟したが、だいたいにおいて面白くない。適当の資料を見つけた場合にのみは、その料理の美事さに思わず三歎の声を放たずにはおられぬものがあることはある。たしかに鋭く真理を摘発し、その意義を深めているのに、敬服せずにはおられぬ。しかしそんな所は、一冊の本に一ヵ所か二ヵ所しかない。他は無理な、きゅうくつな、こじつけが多い。

唯物史観一本槍の信奉者の通弊は、うまく解釈のつかぬ資料は、切り捨てて平気なことである。自分の俎板にのせて料理のできるものしか、膳の上にならべていないくせに、それで全部のように擬装する。

文化的バタ屋の私は、その勇敢な切りすての思いきりがつかない。解釈の及ばぬところは及ばぬところで、なまのままで投げだして、後からくる腕のさえた人の料理に待ちたいと思う。

大いに学界に問いたい野心があるとか、博士論文として審査を求めるとかいうのなら、私のこのような著述では不足とし、あるいは不謹慎とされるだろう。が、私は、一般の人に、なるべく親しみをもって、気がるに、面白く読めて、後からこの道をあるいてくる人のため、参考となり、望みうべくば大いに興味を感発してもらえるようにと考

えて、この研究とも、感想とも、考証とも、随筆とも、論断ともつかぬ一種の文体に到達したのだ。参差錯落、捕風捉影の妙をつくすには遠いが、期するところはそこにある。

最後に、こんな書物を出して、世の中に何の益があるかと言うことだが、私は、こういう知識こそ国と国との親善の基礎をなすと信じている。今日のアメリカには、これがリンカーンやワシントンの国かと疑われるようなことが、ずいぶん無いではない。しかしそれはあの国の現在の一面である。ラノルド・マクドナルドのような無鉄砲な冒険児がとび出したり、ホートンやフェノロサやラフカディオ・ヘルンのような名教授を送ってくれたアメリカならほんとうに心から敬愛できる。その伝統は、根こそぎに失われてしまわず、あの広大な国のどこかには残っているにちがいない。

この歴史的思出を、時々、かき立ててみることが日米おたがいに必要である。

さいわいと今年の一九六〇年は、日米修交通商条約が結ばれてから、まる百年になる。新見豊前守、村垣淡路守などの一行がチョン髷姿でワシントンまで出かけて条約の批准を交換し、咸臨丸が太平洋の初横断をしたのは一八六〇年で、わが万延元年のことだった。

そこで日米両国のあいだに、かずかずの記念行事が計画され、アイゼンハワー大統領もくる、皇太子も出かけられる。歌舞伎も初めて太平洋をわたる。その他にぎやかな計画があるようだが、何等かの出版計画のあるという話をまだ耳にせぬ。この前のペリーの黒船来航百年のときは、文部省も奮発して開国記念文化事業部というものをつくり、前記のとおり、可なり大がかりな記念出版をしているのに、今度はその点では全く鳴りをひそめて、日米修好通商条約締結記念文化事業部というのがつくられたという話も全くないのだ。

じつは私は、二三年前からこれについてはある友人と密々に計画して、さる当局にも進言したのだが、時期尚早だったか、さっぱり手ごたえがない。そこで私ひとりだけで、いかにささやかでも、この年の記念のため何かまとめておこうと思って、コツコツと勉強して、とにかくこれだけのものが出来あがった。

私は一方でこの著作に没頭しながら、一方で講談社から社史の編集をたのまれ、この三年、私の執筆時間はその二つの仕事に両分された。社史の方は去秋出版されて同社の五十週年記念祝典に関係筋にくばられた。その因縁もあるから、その双生児ともいうべきこの書も講談社の野間社長に相談して出版してもらう事にして、日米通商百年の記念祝典に間にあうように世に出る運びになったのは、よろこびに堪えない。なお私の、この気もちをよく心得て、自分の著作のようにして手塩にかけながら、適宜にこの仕事の進捗をはかってくれたのは、出版担当者の窪田稲雄君だった。この古き友人に心から感謝する。

昭和三十五年三月一日朝

木村　毅

凡　例

一、いちおう明治時代までで打ちきったが、それは第一次大戦からは、諸種の事情がひどくちがってくるので、資料の取捨方法や、あつかい方をかえなくてはならないからである。尤も中に記述が大正、昭和にまで及んだのもあるのは、前後の連絡上、当然のことだ。

一、しかし明治時代でも、ぬけているのがある。たとえば二葉亭の『その面影』の英訳が"An Adopted Husband"として、アメリカで出版されている。その英訳者の光井武八郎教授は私の小学校時代の先生なので、ぜひ論及したかったのだが、その書物がついに入手できなかった。Mark Twain, Bret Harte, Joaquin Wüller などは頁数がふえるのでのぞいた。この外、通俗小説 Madam Butterfly, Bertha Clay の諸作、Dime Novels などを加え、さらに Burnett, Alcott, などの少年少女文学にもわたって、続巻をかきたい腹案もある。

一、訳文は、私の語学力の不足と、せっかちの性質なのと、rough translation なのとで、まちがいが多いことと思う。博識の士の是正を待つ。

一、所収二十五章のうち、十六章は開国百年記念文化事業会の「日米交渉史」第四巻で発表したものに修正を加えたので、残る九章が、新たに加えたものである。その中、「徳富蘆花とアメリカ文学」は季刊『明治大正文学研究』で、「ジャック・ロンドンと日本」は『矢野禾積教授記念論文集』で、そして「日本文学の初紹介」と「天は人の上に論考」と「ポーと明治大正文壇」は『英語青年』で発表した。『英語青年』が再三にわたって長文連載のため紙面を提供せられた好意に深く感謝する。他の五編は新たに起稿した。

目次

序
凡例
第一章　日本人とアメリカ・インディアン
一　日米の宿命……三
二　金銀島の誘惑……五
三　日米相互の初認識……八
四　新井白石と頼山陽の対米知識……一三
五　アメリカ小学教科書の「日本」……一五
六　チャイニース・レポジトリー……一七
七　オランダの警告……二七
八　太平洋の捕鯨船……二九
第二章　日本にきた最初のアメリカ人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com